

一

次の文章を読んで後の問に答えよ。

新型コロナウイルス禍が因となった生活上の変化、いわゆる「新しい生活様式」について書けとの編集部の依頼に応えて、いまこうして書いているわけなのだけれど、さて、なにがどう変化したんだろうかと考えてみて、①あまり変化がないことに気がつく。店で人と飲食したり、演奏会を聴きにいたり、ジャズクラブで酒を飲んだりの機会はまだかにめっきり減った。恒例の花見の宴も催さず、紀州の海で遊びもせず、教えに通う大阪の大学も遠隔授業となった。頼まれていたイベントはことごとく中止となり、いとうせいこう氏と定期的にやっていた「文芸②」もオンライン、文学賞の選考会や授賞式はあるにはあったけれど、いずれも酒食の類はなし。自分は普段やたらフルートを吹いたりしているのだけれど、この一年余、楽器を手に人前に出たのは二回。一回は能楽の安田登さんの依頼を受けて、漱石テクストの朗読との共演で吹き（無観客のホールでの録画）、もう一回は西荻窪「アケタの店」で、明田川莊之さんのグループのゲストで出た（有観客だがそもそも客は少ない）だけ。ようするに家に引きこもる時間がひじょうに長くなったわけで、とすれば明らかに変化はあったはずなのに、変化した気があまりしないのはなぜか。

おそらくそれは自分が小説家だからだ。小説家が居職であることはむろんあるだろう。自宅——とは限らぬどこかに凝って閉じこもり、いままさに自分がしているように、機のフジツボのごとく机に貼り付いて文字を連ねる生活の資を得ていると云う事情はある。小説家は「引きこもり」が常態なのである。もちろん世の中には「活動的」な作家という一種類があつて、自分が他と比してどれくらい「活動的」なのかはわからぬが、かりに大いに「活動的」な部類に属するとして、しかしやはり「引きこもり」の本質は変わらなないだろう。小説家は精神的に「引きこもる」必要があるので、世間に「社会的距離」をとらざるをえないからである。

ベトナム戦争の前線に③タンス飛び込んだ、戦後作家中最も「活動的」と目される小説家に開高健があるが、かれの報告文を読むと、世界から徹底して距離をとるがゆえに獲得された独自の眼があることに気づく。報道家の視線にそれは似ているが、報道家が、たとえば戦争の実相を伝えようと④キ図するのに対して、開高はそうではない。とくに何かを伝えようと目論むわけでもなく、とりあえず戦場に身を置いてみて（鶴のマークの日本航空の肩掛鞆を抱えて）、生起する出来事に、とりわけおのれの内部にまき起こる出来事に眼を凝らす。それは近所の銭湯や居酒屋での見聞をエッセーに記すときの態度と基本は変わらない。いわば銃弾飛び交う戦争の最前線で世界から「引きこもる」ので、そのことが魅力あるテクストに結実したといえる。

作家は「引きこもる」。小説家は小説を書いたがゆえに小説家になるのではなく、②人はまず先に小説家になつて小説を書く。ここで小説家になるとは、小説家の態度で世界に向き合うの意で、これすなわち精神的「引きこもり」である。みずから進んでなす逼塞ともいふべきその心的な構えが、小説を書くことを可能にする。「社会的距離」は小説家の本質といえる。

という次第で、生活様式はいささかも改まらなかつたのであるが、ひとつ変化があつたのは、それでいいのかとの反省、というか焦⑤ソウに似た感覚が生じたことだ。国民を分断し、孤立した人間をナシヨナリズムの網で捌き上げ再組織化するのが国民国家の支配原理だとすれば、③新型コロナウイルス禍は国家にとつて力の伸張の絶好の機会となる。国家による一元的な支配は人を幸福にしないばかりでなく、惨禍をもたらしかねぬとは、われわれが近現代の歴史から学んできたところのものはすだ。国家に抗しうるのは、社会——多様多層な人間の具体的な繋がりであるが、ウイルスはそれを断然破壊する。社会は「絆」などという空⑥キヨな概念が支えるものではなく、人と人が密に交流し、ともに行動し対話するところにしか生まれない。多くの著述家が④国家と社会をないませにし、「国家社会」なる語を用いて、⑦惘然たるほどに社会組織のそもそも⑧脆弱な日本において、人々がより強力な国家統制を烈々求めたりする現状では、社会はいよいよ影を薄くしていくほかならう。

これは端的にいつて危機である。この危機に際して、小説家にできるのは、いま自分がしているように、ウイルス禍を⑨奇貨として力を伸張せんとする国家、およびそれに加担する勢力を批評批判することだが、しかし肝心の社会形成の面では、既述のごとく、社会的距離の確保を本性とする⑩小説家は無力といわざるをえない。小説家としてできることは少ない。これまでの自分は、傍からはそう見えぬかもしれないが、ひたすら小説を書くことにむけて生活を設計してきた。小説を書くのをやめるつもりはいまのところなく、とすれば右の構えは変えられない——いや、本当にそうなのか？とどちらにしても、新型コロナウイルス禍があけたあとの時間、もはや旧に復することはなさそうに思えるその時間にこそ、「新しい生活様式」と自分が押し出される予感がいまはある。

雑誌「新潮」奥泉光「ある予感」による

問一 傍線部②のカタカナを漢字に改めたものとして適当なものをそれぞれ①～④の中から選んで記号で答えよ。

- ②①漫②慢③満④万 ①①且②担③短④単 ③①基②企③期④機
④①創②莊③燥④想 ⑤①拒②許③嘘④虚

問二 傍線部⑦の意味として適当なものをそれぞれ①～④の中から選んで記号で答えよ。

- ⑦①気にしない ②勢いのいい ③怖ろしい ④情けない
①①小さくて弱い ②病気に弱い ③もろくて弱い ④見かけより弱い

- ⑦①莫大な財産として ②天が与えた試験として ③隠れみのにして ④めったにない機会

問三 傍線部①の理由として適当なものを①～④の中から選んで記号で答えよ。

- ①文学賞の選考会や授賞式などのイベントはあったが、受賞バレーナイなどがなくて地味だったから。
②コロナ禍だからといって自宅に引きこもるのではなく、小説家は引きこもって仕事をするのが普通だから。
③舞台上で演奏をしたり朗読をしたり、オンラインであっても授業ができたりと今まで通り活動しているから。
④コロナ禍で急激に変わったコミュニケーションのとりかたに自分がついて行く事ができていないから。

問四 傍線部②の内容として適当なものを①～④の中から選んで記号で答えよ。

- ①周囲の出来事を遮断し、自分の内面を見つめながら精神の変化を細大漏らさず記したものが小説になる。
②周囲の物事を冷静に対象化してとらえるという姿勢を先に身につけておいて、とらえたものを小説にする。
③小説家の誰にも侵されない精神的「引きこもり」のすがたをありのまま文章にしたものが小説になる。
④小説家は見聞した世界の真相をできるだけありのまま伝えるために「引きこもり」が不可欠となる。

問五 傍線部③の内容として適当なものを①～④の中から選んで記号で答えよ。

- ①新型コロナ禍によって人々が不安がったり孤立感を抱いたりしているような時は、国が国民を一つの価値観で支配する好機となる。
②新型コロナ禍によって人間関係が分断されやすいので、国民が孤立せずに協力し合って新型コロナと戦うように国は国民に訴えかける。
③国が一元的な支配を強めると新型コロナの感染拡大流行しても国民の移動を禁じたり、患者を強制的に収容でき、ウイルスを押し込めやすい。
④新型コロナの感染拡大流行するような時は国家権力による強制を国民が切望し、権力に反対する者を排除する雰囲気や国民の間に出てくる。

問六 傍線部④に対する筆者のとらえ方として適当なものを①～④の中から選んで記号で答えよ。

- ①国家とは政権の施策を正しいものとして推進するものであり、社会は国家の一部を担って労働をしている個人々の集まりである。
②国家は外国の侵略から国民の生命や財産を守るものであり、社会は地方公共団体のルールを守りながら互いに支え合っている集団である。
③国家は国民の多様性を否定して一元的な統制をしたがるものであり、社会は国家の言うことを信じて国家に奉仕する集団である。
④国家は権力を使って国民一人ひとりを分断して支配しようとするものであり、社会は地域や職業や趣味などを通じてできる仲間である。

問七 傍線部⑤の理由として適当なものを①～④の中から選んで記号で答えよ。

- ①小説家はあらゆることに公平でありたいと思い、どんな組織からも独立していなければならないから。
②小説家はフイクションによって人間の真実の姿を創り出すので周囲の人の心に溶け込めなければならないから。
③小説家は敢えて孤独を求めているので仲間作りには不向きであり貢献できないから。
④小説家としての保つべき精神的独立をコロナ禍が収束した後まで維持する自信がなくなっているから。

解答番号 ⑬

二

次の文章を読んで後の問に答えよ。

人が人を許すと言うことで、私がずっと胸に仕舞い込んで、時折、①その人の淋しげな表情を思い出す出来事がある。

今から三十年近く前の出来事である。

②当時、私は前妻を癌で亡くし、仕事を休み、酒とギャンブルで日々を過ごしていた。酒や博奕は人間の中の、ギョウ楽の部分に刺激するので、嫌なことや、切ないことを考えないで済む。③時間を無為に過ごすには、それが一番楽だった。

東京を離れ、故郷に戻り、借金した金を握りしめてギャンブル場へ行き、陽が落ちると酒場で酔い^ぎ泥れていた。今から考えると、息子のそんな姿を見て、母はどれほど心配していたかと思うし、沈黙して何も言わずに私を見ていた父の心中を思うと申し訳なかったと思う。

父は肉体も、精神も強靱な男であつたが、それ以上に切ない思いをしている人間にやさしい人であつた。
④「ハソ侶を亡くしたのだ。しばらくは好きなようにさせておきなさい」

父が母にそう言ったという話を聞いたのは何年も経った日のことだった。

たしかに私は落ち込んでいたが、周囲の人が哀れに感じていたとしたら、自分を哀れとか、はじめと思う気持ち(A) なかった。

ただ何かをしようという気がどう踏ん張っても湧いて来なかった。そんな心身の状態は生まれて初めて経験することだった。

——なぜ気が、活力が起らないのか。

私にはその理由がわかつていた。妻の死の直後に、それまで私が想像さえしなかった酷い言葉を発せられたこともあつたが、子供の時から酷い言葉をあびせられたことが何度かあつたので、そんなことでまいってしまふほどヤワではなかった。

それでも子ども時代である。切なさに母にそれを打ち明けたことが一度あつた。
母はしばらく沈黙したのち、こう言った。

「あなたは男の子でしょう。あなたがそれだけ口惜しいと思つたことなら、あなたはそういうことを人に対して一生言わないと決めればいいんです。父さんも母さんもそう決めて生きています」
母の言葉は私を知りたいた答えではなかったが、私はそうすべきなのだと思う。ひどい差別や、ひどい中傷はどんな時代もあるし、そんな世の中で、それを平然と口にするのが人間という生きものである。

だから他人からあびせられた酷い言葉や態度で、私の身体がこわれることはなかった。

三十数歳の男が踏ん張ってこれからも生きるんだという気が起こらなかったのは、中傷の言葉も含めてすべてのことが、
——許せなかったのである。

何もかもと書いたが、正確に言えば、妻を死に至らしめた運命を許せなかったのである。
運命に憤つた己一人が(B) と生きることが許せなかったのである。

さて、その心境を、今こうして作家として新しい家族と生きている私を、再生させた男の一言を紹介する。
その人は名前をヤソと言つた。

京都の競輪場で声をかけられた。私よりひと回り歳上だった。私のことを知っていた。それがすでに⑤ウトましかつた。同情されると腹が立った。「私、あなたと同じ国の出身でね」それで余計に相手にしなかった。⑥同胞を振りかざすことを潔しとしないで生きてきた。男は半日私につきまとつた。私はとうとう声を荒げた。すると男は言った。「あなたにだけ話しておきたいことがあつて声をかけました」。顔を見返すと、左にクロイドが残っていた。

私たちは競輪場裏手の丘に登つた。そこで男の話を聞いた。

広島に原爆が投下された日、男は少年で母親と二人でいた。二人して家族を探して死体の山が重なる川べりや焼け跡を歩いた。
「こんな酷いことが起こるなんて……」

母親は悲痛な顔をして少年と二人で歩き続けた。母親は何度も手を合わせていた。

少年はその母親に手を合わせる必要がないと言つた。母親は少年が周囲の日本人から苛められ、いつも喧嘩し、彼等を憎んでいることを知っていた。だから死体を見て「いい気味だ」と口にしたとき、母親は少年の頬を叩いた。初めて母親に⑦ナグられた。

べるといじめや差別を受けても命があることに感謝して今後を生きていこうと覚悟し直す。

②自分が許せなかったことは自分の身の上で起こる不運や差別や中傷だったが、母親の教えは自分が嫌なことをされたら、それを誰に対してもしないように指導したことはスクールが大嫌い。

③自分の不運を嘆いて酒やギャンブルに逃げ、ふてくされたような生活ばかりしていた筆者の心とそれを心配しつつも寛大に許していた父母の愛情の深さを比較して今さらながら恥ずかしい。

④ヤン氏の母は、自分たちを苛めた憎い日本人も同じ弱い人々だとして仏の慈悲やキリストの愛のような心で許したが、自分が許せなかったことはわが身の上のことばかりで心が狭く恥ずかしい。

三

次の各文の (A) ～ (G) の中に入る言葉として適當なものを含の①～⑨から選んで記号で答えよ。

解答番号 A [26] B [27] C [28] D [29] E [30] F [31] G [32]

A 「今日の天気は風も無くテニスをするには (A) ですね
B 「無理だと始めから分かっていたのに (B) よ、あいつは」
C 「頭を下げて頼んだけど、 (C) に断られたよ。」
D 「会社はつぶれても彼女のような人材は (D) ですよ」
E 「そんな (E) 顔をして売り場にいるとお客さんが逃げますよ」
F 「彼女なら気が利いているから (F) 対応ができますよ、ここは任せておきましょう」
G 「双方うまくいくように俺が仲を取り持つてるのに、そんなことを言われると俺も (G) よ」

- ① ほぞをかわ ② 立つ瀬がない ③ 辛気くさい ④ 引く手あまた
⑤ 往生際が悪い ⑥ けんもほろろ ⑦ そつのない ⑧ おあつらえ向き ⑨ てんやわんや

四

次の A ～ G の □ に後の①～⑨の中から適當な漢字を補って四字熟語を完成させよ。

解答番号 A [33] B [34] C [35] D [36] E [37] F [38] G [39]

A □ 和雷同 B □ 俱戴天 C 絶 □ 絶命 D □ 然自若 E □ 顔無恥 F □ 紀肅正 G □ 言令色

自分の主義・見識がなく、むやみに他人の意見に従うこと。
憎しみや恨みが深く必ず倒すべき仇敵。
追いつめられた困難な立場、場合。
ゆつたりと落ち着いた様子。
あつかましく、恥知らずなこと。
物事の基本・規律を正すこと。
ことばを飾り外見をつくること。

- ① 体 ② 綱 ③ 厚 ④ 好 ⑤ 付 ⑥ 泰 ⑦ 不 ⑧ 対 ⑨ 巧

五

次の A ～ G の熟語の対義語として適當な熟語を含の①～⑨から選んで記号で答えよ。

答番号解答番号 A [40] B [41] C [42] D [43] E [44] F [45] G [46]

- A 老練 B 放任 C 暴落 D 舶来 E 繁栄 F 静寂 G 原理
① 衰微 ② 統制 ③ 高騰 ④ 応用 ⑤ 喧騒 ⑥ 国産 ⑦ 英知 ⑧ 熱烈 ⑨ 幼稚

六

次の文章の (A) ～ (G) に入る言葉として適當なものを含の①～⑨から選んで記号で答えよ。

解答番号 A [47] B [48] C [49] D [50] E [51] F [52] G [53]

明治維新となってもすべてがすぐに変革されたわけではなく、和歌が古典的な思想や題材から解放されて面目を一新するのは明治も二十年代半ばを過ぎた頃である。呼び方も旧来の和歌から短歌と呼ばれるようになった。明治二十六年、落合直文が (A) を起こした頃より、歌壇にようやく明治時代らしい清新な息吹が感じられるようになった。落合直文もまだ著しく革新的というほどではなかったが、従来の類型的な和歌に比べれば清純の趣に富んでいた。その門下からは多くの新進の歌人を輩出し近代歌壇革新の先駆となった。

B () は現在最も古い歴史を持っている。

浪漫主義が華やかだった頃、強烈な個性を発揮して歌壇に登場したのが与謝野晶子である。彼女は与謝野鉄幹が (C) を創設するとすぐに入会し、雑誌 (D) を通じて華々しい活躍をした。彼女の最初の歌集

(E) は島崎藤村の詩集若菜集とともに明治浪漫期を記念する典型的作品と言える。

一方、与謝野晶子らの浪漫的歌風に反対して着実な写生に立脚した客観的な歌風を提唱した正岡子規は、すでに俳句の革新に成功を収めていた。その後歌道の革新にも意欲を燃やし、明治三十一年 (F) という歌論を著した。その中では、徒来手本とされてきた古今和歌集をしりぞけて、写実的な万葉集を範とするように提唱した。正岡子規を中心とする短歌の集まりを (G) と称し、浪漫主義の時代が過ぎて自然主義の時代となつた。正岡子規を中心とするいわゆるアララギ派の人々が歌壇全体の中心となつていく。

- ①車前草社 ②浅香社 ③新詩社 ④心の花 ⑤みだれ髪
⑥スバル ⑦根岸短歌会 ⑧歌よみに与ふる書 ⑨明星